

特集1

シイタケで 飛翔する 北海道の福祉施設

平成22年現在、北海道の社会福祉施設は老人から児童まで含め、公営、民営合わせて全部で2800カ所余りある。
そのうち、身障者授産施設や知的障害者授産施設、精神障害者社会復帰施設など、何らかの労働、生産に関わっている施設は200カ所ほどで、そのうちの約50カ所が原木あるいは菌床シイタケ栽培を行っている。
今やシイタケ栽培は福祉施設にとって重要な事業になってきている。
そうした数ある施設の中で、今回は異なるコンセプトを持って運営されている三つの施設を取材し、シイタケで飛翔する北海道の福祉施設の姿をとらえた。

てつなぎ工房の手製シイタケラベルを貼った大きなXR1シイタケ



シイタケ栽培で 就労継続支援A事業をめざす

北海道川上郡弟子屈町

障がい福祉サービス事業所 てつなぎ工房

工房の柱となる 仕事として シイタケ栽培を選ぶ

北海道川上郡弟子屈町にある障がい福祉サービス事業所てつなぎ工房は、平成七年に障害児童を持つ親たちの「手をつなぐ親の会」が作った「工房てつなぎ」が母体である。平成十四年に社会福祉法人の認可を取り、平成十八年に「就労継続支援B事業」「就労移行支援事業」の指定を受けて、「障がい福祉サービス事業所てつなぎ工房」となった。

「この作業内容としてはリサイクル石けん作りや便利屋、お菓子作り、農作業の手伝いなど、いわば地域のお手伝い的な仕事が多いんです。でも、ノーマライゼーションの理念に基づ

き、障害者が地域社会から隔離されることのない『完全参加と平等』を目標に、各作業や様々な活動を通して利用者一人ひとりの人生を豊かにするための支援と誰もが住みやすい地域社会の環境づくりを目指して運営してきました」と語るのは、生活支援員で椎茸栽培事業担当の池田健太さんである。

平成二十年に日本財団の助成金を申請することになり、新しい事業を企画することになった。「私はそれまで他の福祉施設にいたんですが、てつなぎに入ってから間もなく、新しい事業を企画する話があることを知り、それなら前の施設でやっていたシイタケ栽培はどうだろうと思って提案したんです」と言うのは、サービス管理責任者を務める本間智美さんである。

てつなぎ工房は、社会福祉法人てつなぎの事業所である。日本財団の助成金を得るための申請には社会福祉法人てつなぎの理事会の承認が必要である。

当時、近い将来、てつなぎ工房を就労継続支援B事業から就労継続支援A事業にしていきたいと考えていた高砂弥生施設長を筆頭に、職員たちは理事会に、利用者の工賃のアップを図るためにも柱となる事業が必要であること、シイタケ栽培はその柱になり得ることを説いた。それは就労継続支援A事業への実績作りでもあった。

なお、就労継続支援A事業とは、就労継続支援B事業が「非雇用型」と呼ばれるのに対し、「雇用型」と呼ばれるように、養護学校卒業業者や離職した人等を対象に、雇用契約に基づき働きながら、一般就労も目指す事業である。そのため、労働基準法が適用されるなど、一般企業に準ずる事業が求められる。

この困難であれ、大きな希望の持てる事業を進めるため、理事会の承認を経て日本財団の助成金を得、平成二十年十二月に

は二棟のハウスが完成。平成二十一年三月には購入した三七〇〇菌床が入荷した。そして、五月に除袋し発生したシイタケを初めて出荷した。その後、さらに菌床数を増やし、現在は十九歳から七十四歳までの利用者八人が年間XR1二万二〇〇〇菌床を栽培している。年間出荷量は九トンから一〇トンになっており、主として道内に多くの店舗を持つスーパーのうちの近隣八店舗に販売している。スーパーでは年間を通して市場価格より高めの定価格で買ってくれるので、シイタケ事業としては黒字となっているという。

温泉熱を利用して コストを下げる

弟子屈町には摩周温泉があり、工房のハウスの隣にある町営老人ホームでは、毎日風呂に使い切れない温泉を捨てていた。「温度は六〇度もあります。これを栽培ハウスの熱源として使いたい。町に相談したところ、とりあえず一年間は試しに無料で使ってもらいました。ハ



「工房では、シイタケ事業の利益も含め、全作業から得た利益を全員で分けています。大きな生きがいを感じる人もいて、栽培管理に責任を持ったために好きだったお酒を減らした人もいます。みんなシイタケ作りが好きだと言っています」と本間さん

は言う。そして、ハウスの増棟による栽培規模の拡大や弟子屈町の名産にすることなどを計画しているという。

それは、あくまでつつなぎ工房の利用者一人ひとりの人生を豊かにするための支援と誰もが住みやすい地域社会の環境づくりのためである。

つつなぎ工房は、去る十一月五日、北海道きのこ生産・消費振興会主催の北海道しいたけ品評会菌床部門で優秀賞を授与された。これは、しっかりと地域に足をつけた事業としてシイタケ栽培が発展していることをはっきりと示すものである。

左上●収穫した生シイタケをトレーに詰める 左中●丁寧に一つひとつ並べて収穫される 左下●ふんだんに使える温泉のお湯は常にあふれている 下●シイタケ事業に携わる利用者と支援者、職員の皆さん。一番左が高砂施設長、後列一番右がシイタケ事業担当の池田生活支援員、その隣が本間サービス管理責任者

